

## 高橋正作

正作は、江戸時代の終わりごろ（1803年）山田村（現在の湯沢市山田）に生まれた。22歳のとき、小野村（湯沢市雄勝町小野）の高橋家におむこさんになった。そのころ、小野村はとても貧しかった。村の田んぼの3分の1は荒れ果てて、佐竹の殿さまへおさめる年貢も出せなかった。

山は草ぼうぼうか、はげ山が多く、家で木をたくことさえできなかった。

「このままでは、村がだめになってしまう。」と正作は心配した。そこで、正作は荒れた土地を豊かにしようとした。真っ先に自分が田や畑に入ってはたらき、お金のない人にはお金をかけて田畑をたがやさせた。山は村人に平等に分けて、スギやクリ、ナラなどの木を植えさせた。のちに小野の山の木は、売り出せるほど大きくなった。

地域に養蚕を始めたのも正作だった。村人に十分な桑の苗木をあげ、空き地に植えさせ、蚕を飼わせた。そして、蚕が作るまゆから生糸を作って売った。こうした正作のあたたかい心と村人の努力で小野村は豊かになった。

24歳のときには、村長になった。そして、村のためにつくすかたわら、農業や農産物を調べるために東北地方を、さらには日本国中をこまかく見て回った。

1828年（文政11年）、秋田藩（秋田県をおさめる役所）は、正作のまじめさをほめ、玄米100俵を与えたが、正作はそれを村人に全部分けた。

1833年（天保4年）には、大ききんが起こった。天気が良くならず、米や野菜がぜんぜんとれなかった。そのとき、正作は、ためておいた玄米を村人に分け与えた。その上、自分の家の田畑や山林を質屋に入れてお金を借り、米百俵と野菜を買って、まずしい村人へあたえた。

2年後、正作は、村人たちを家へ集めた。集まった村人たちは、みんな正作からお金や米を借りた農民たちだったので、「正作にお金を返さなければならない。」と心配そうな顔をしていた。ところが、正作はその農民たちにごちそうをし、しゃっ金のことを書いた証文をみんなの前で焼いたのだった。

やがて、正作は小野村と横堀村の二つの村長になった。1879年（明治12年）には、秋田県の農業を指導する大事な役目についた。77歳であった。年はとっていても、がんばろうとする気持ちは、若い人たちに負けなかった。88歳のときまで、第1回から種苗交換会に招かれて石川理紀之助に指導した。

1894年（明治27年）6月23日、正作はねむるようになってなくなった。92歳だった。お墓は小野小学校（現在の小野地区センター）のすぐ近くであり、今も豊かに実った田んぼを見守っている。